

氏名（本籍） やの あつし
矢野 淳 (東京都)

学位の種類 博士（臨床心理学）

報告番号 甲第1474号

学位授与の日付 平成26年3月25日

学位授与の要件 学位規則第4条第1項該当（課程博士）

学位論文題目

獣医師ストレスの人間科学的理解と効果的な対処に関する研究

論文審査委員（主査）	福岡大学	教授	林 幹男
（副査）	福岡大学	教授	皿田 洋子
	福岡大学	教授	徳永 豊
	福岡大学	教授	高妻 紳二郎

博士學位申請論文 要旨

博士學位申請論文名

獣医師ストレスの人間科学的理解と効果的な
対処に関する研究

博士學位申請者氏名：

矢野 淳（やの あつし）^①

（平成 25 年 5 月 日 提出）

小動物臨床に携わる獣医師（以下獣医師）は、様々なストレスを受ける。獣医師のストレス要因を調査する予備研究を実施したところ、大きなストレス要因は飼主であると考えられた。獣医師のストレスについての先行研究では、獣医師が受けるストレスのメカニズムに言及するものが認められなかったため、本論文では、獣医師が飼主に対して抱くストレスに焦点をあて、〈獣医師が抱く飼主に対するストレスの実態とその効果的な対処〉の仮説を導くことを目的とし、仮説を生成するための研究を6つ示した。

研究方法として、一般に“総合性・総論を欠く”と評される人間科学の弱点を克服するため、構造構成主義的人間科学の方法論を採用した。すなわち、Husserlに代表される現象学的思考法と関心相関性の概念を研究のメタ原理においた、6つの研究から継承型に仮説を構造化する人間科学の研究の手法を採用した。一つ一つの研究手法を用いた理由や研

究時に統制されている条件と分析から結論に至る軌跡を明示すること，研究結果の適合度や現象に即した精密な考察を表記することで仮説の信頼性・妥当性の拡充を目指した。構造構成主義的人間科学の方法論によって，質的研究と量的研究の主客をめぐる問題，科学性の問題，心理統計学における客観性の問題を克服した。

6つの継承型研究から導かれた仮説によると，獣医師の飼主に対するストレスは，獣医師と飼主のペットに対する認識のギャップ，治療構造上の特徴，飼主の性質などによって生じる飼主への否定的感情が関係していることが明らかとなった。獣医療の独特な治療構造，獣医師になった動機，獣医療の難しさなどの獣医師側の要因と，飼主の飼育動機，飼主の性質，飼主の期待などの飼主側の要因から，理性的にペットを認識する獣医師と感情的にペットを認識する飼主の間で獣医師と飼主の認識のギャップが生じることがある。

る。このギャップは、飼主の認知的不協和とその低減反応が起因し獣医師の説得で解消しづらく、獣医師は飼主との関係を維持したい気持ちと回避したい気持ちで分裂した両価的感情を有するため、獣医師に葛藤を生じさせる。獣医師が飼主の感情を理解できず、この葛藤を獣医師内で処理できない時、飼主に対する恐怖や怒りや憎悪に近い否定的感情となり、獣医師にとって飼主に対するストレスとして感じられる。

獣医師は飼主への否定的感情に起因するストレスを、『問題解決的・関係志向的』『関係回避的』『中間型』のストレス対処によって対処している。獣医師の飼主ストレスにおける問題解決的コーピングは、飼主とのコミュニケーションに限られ、これによってコーピング出来ない時、『関係回避的』『中間型』のコーピングを取らざるを得ない。ネガティブ関係コーピングを用いないこと、お互いを理解し認めるが過剰な歩み寄りをしない

こと，社会構成主義的に治療構造を理解することは，獣医師のストレスを軽減する効果が認められた。

このような獣医師の飼主に対するストレスの構造を獣医師がメタ認知することは，獣医師の飼主に対するストレス対処を効果的に行うために有用であると考えられる。

内容の要旨

(1) 論文の概要

かつて人間に飼育される動物は、その多くが労役や食料生産を担う家畜として飼主との明確な主従関係のもとで管理されてきたし、獣医師の役割もそうした文脈の下で動物の健康管理・疾病治療に携わってきた。しかし、今日では、ペットブームに象徴されるように、飼育される動物は飼主の自己対象化されたパートナー(依存対象)としての役割を担われ、その行動や疾病はもとより、獣医療ニーズにも飼主の動物への自己投影が色濃く反映されるなど、獣医師の業務や役割も大きく様変わりしている。その結果、獣医師は日々の診療にこれまでにない大きなストレスを体験しているという。しかし、獣医療研究の方法論ではこの点へのアプローチは難しく(研究対象になりにくい)、本研究は獣医師でもある筆者が、臨床心理学(広い意味での人間科学)的見地から、今日の獣医療における獣医師の主たるストレス要因と適切な対処方略について一定の仮説生成を試みたものである。

ここで用いられている研究方法には、一般に人間科学の弱点とされる「総合性・総論の欠如」を克服するために、Husserl, E.に発する現象学的思考法に基づく構造構成主義的人間科学の方法論に基づき、6つの研究を通して継承的に仮説を構造化する方法がとられている。

論文の構成は大きく二部から構成され、第一部が獣医師ストレスとその対処の実態の解明、第二部がストレスへの効果的対処方略の生成と検討に関する研究からなる。

第一部では、獣医師対象の調査から、彼らが自覚するストレスが飼主の性質、獣医師基準における飼主の無理解、病院経営、獣医療の難しさ等から成ることが見出されたが、多くは飼主との関係における認識のギャップ、すなわち「獣医学的見地からの専門的・理性的な獣医師と自己愛的・感情的な飼主」に由来する飼主への否定的感情の処理の難しさであり、その対処において獣医師は、ストレス理論で一般的に効果的とされる「問題解決的・関係志向(コミュニケーション促進的)対処と無効とされる「関係回避的・情動焦点型」対処との間での不協和(葛藤)に晒されやすいことがストレスを強めていることに繋がっていることが見出された。

第二部では、ストレス理論にみる対人援助専門職(医師、カウンセラー、等)のストレス対処研究をレビューした上で、援助者のストレス軽減に有効的とされるコミュニケーション促進的対処が獣医療において困難となる要因を、動物－飼主－獣医師という三者構造における飼主と獣医師の動物に対する物語(心的歴史)の相違に着目し、筆者は今日の精神医療や心理臨床の領域で注目され、実践化が進みつつある社会構成主義的アプローチとされる narrative-based-medicine (NBM) の方法を取り入れた事例を詳細に検討し、その効果を実証している。すなわち、獣医学という科学性をもって飼主の自己本位的な動物飼育の歪みを正すというような説得的なコミュニケーションを試みたり、飼主に過剰に歩み寄ることではなく、飼主の動物との関係性(共依存)の物語を自らの物語(獣医学の科学性に合理化された自身の動物への思い入れ)と同じように尊重し、その心的固有性(生き方、価値観、歴史、等)を受容し共感しようとするコミュニケーションが獣医師および飼主双方のストレス緩和と問題への「現実的」対処を促進させる治療関係を築き維持させる可能性をもたらす、

という結論を導き出した。

(2) 本研究の意義

本論文は、獣医療の構造的特徴は、直接的施療対象は動物ではあるが、そのニードは飼主の動物との関係性(物語)にあることから、獣医師の真の支援対象はむしろ飼主になるという点にある。このことが、当該医師に通常の医療や直接的対人援助とは異なるストレスやその対処法の工夫が求められる、ということを論じたものである。極論すれば、今日の獣医療は、動物施療行為を、獣医師の自覚はともかく、飼主へのカウンセリング的支援として担わねばならない構造にあるということである。実は、同じような構造は、小児科医療や学校教育、商品の苦情処理等の分野でも見られる。昨今の小児科医や教師を襲うストレスの多くは親(保護者)や購買者対応をめぐるものであることを考えれば、本研究は獣医師のストレス問題に限らず、様々な対人サービス業界において参考され、検証される意義と可能性を有している。

前述したように、現時点では、当事者(獣医師)の専門性にかかる必然的課題ながら、当該学問分野を支配する方法論(いわゆる自然科学的アプローチ)での限界性から、本研究は敢えて人間科学的と称するように、主に質的資料分析を中心とした構造仮説継承型の研究方法に依っている。従って、本研究の成果(生成仮説)は、今後、より客観科学的な方法で検証、一般化される必要性もある。こうした限界性や課題を持ちながらも、現実的に日常の専門業務において苦慮している獣医師にとって、本研究は、そのアイデンティティと達成感、モチベーション等の維持に向けたヒントや方法を示唆するものとして評価できる。

審査結果の要旨

(1) 審査委員会・口頭試問

本論文は獣医療に係るテーマであるが、内容が人間科学(心理学)的アプローチに特化される研究であることから、論文筆者の所属専攻の臨床心理学関係教授から構成された。

まずは、本研究の方法論上の課題が指摘される。科学性、客観性という意味では、**data source** としての研究協力者(獣医師や飼主、一般人～大学生・大学院生)の条件的妥当性やサイズ(量)が十分な推計学的解析を期待できるものでないこと、また質的解析の方法もKJ法のみであり、個々の被験者における体験の構造化における妥当性担保にも余地を残さざるを得ない。しかし、獣医師ストレスに関する量的・推計学的解析方法が適用出来るほどの資料や仮説が未だ見出されていない現状では、まずは現象そのものの構造化モデルを継承的に生成することが優先されよう。その意味では、科学的厳密性は少々差し引いても、獣医療界における本研究の役割は相応に評価されるべき意義を有していると判断された。

また、獣医師が自覚するストレス要因は飼主との関係だけでもない。医療技術の進歩(高度化)は飼主・獣医師双方の動物との物語(narative)を超えるニーズや期待、精神的・経済的負担を求めることにもなり得るし、一層、複雑な構造下でのストレス反応として検討する必要があることも加えられた。

(2) 公聴会

公聴会では、上記審査会での指摘や話題に関連するもののほかに、獣医師に限らず専門家としての役割遂行に伴うストレスそのものの考え方・受け止め方へのコメントがあった。すなわち、そのネガティブな側面だけでなく、専門家としてのミッションやモチベーションを高める方向に生かす工夫や、役割の経済的価値(営利的行為としての獣医療)としての

意味づけ(合理化)も期待できるストレス対処法になる可能性である。また、今日の人間と動物との共依存化したペット・ブームにあつて、これからの獣医療の基本的スタンス(「動物」の医療 vs 「飼主」のケア)の方向性を問う質問等もあり、現代における人間の孤立化と自我境界の脆弱さが進む状況にあつて、獣医療の役割の本質についても議論されるなど、出席者の本研究への関心の高さがうかがわれた。